

## 『日本語の表記形態に関する心理学的研究』

兵庫県立総合リハセンター	浮田 潤
関西学院大学	杉島一郎
樟蔭東女子短期大学	皆川直凡
神戸山手女子短期大学	井上道雄
関西学院大学	賀集 寛

われわれは本研究プロジェクトにおいて、日本語の表記形態の問題をとりあげ、日本語のある単語をある表記（漢字・ひらがな・カタカナ）で目にする頻度がどれ位か（主観的表記頻度）を評定法によって調べるといった試みを行ってきた。さらにその結果を基に、主観的表記頻度を規定する要因や、その心理学的な効果に関する検討を行ってきた。

この度、それらの成果を一つにまとめ、心理学的モノグラフ No.25 『日本語の表記形態に関する心理学的研究』と題して、日本心理学会より刊行した。そこでここでは、その紹介ならびに内容についての報告を行いたい。

### <本書の概要>

#### 目次

第1章	序論
第2章	750語の主観的表記頻度調査
第3章	主観的表記頻度を規定する要因
第1節	中高年者の主観的表記頻度
第2節	主観的表記頻度と語の熟知性
第3節	主観的表記頻度に及ぼす教育の影響
第4節	主観的表記頻度と語の出現頻度
第4章	主観的表記頻度の心理学的実在性に関する実験
第1節	主観的表記頻度調査結果の妥当性に関する研究
第2節	主観的表記頻度の神経心理学的検討
第3節	単語のイメージと表記形態、主観的表記頻度の関係
第4節	俳句とその構成語を刺激材料とする表記形態差の検討 - 情緒的意味の違いを中心として

#### 第5章 まとめと今後の課題

付表1	750語の主観的表記頻度と熟知性
付表2	750語の主観的表記頻度による分類（表記型）
付表3	750語の属するカテゴリとカテゴリごとの主観的表記頻度の平均と熟知度の平均

日本語を特徴づける大きな要素のひとつは、その表記形態の多様さである。具体的には漢字・ひらがな・カタカナ、そしてローマ字という複数の表記を有し、さらにはこれらを巧みに使い分けている日本語の表記形態は、世界の数ある言語の中でも独特の地位を占めているといえよう。そしてまた、この日本語の表記形態の多様さは、古くより様々な議論や研究を生み出す大きなテーマともなってきた。

これらの議論や研究にはいくつかの流れがあるが、そのひとつは日本語の表記がいかに変遷してきたか、また現在それをいかに表記すべきか、そしてその表記をどの様に教育すべきか、といった国語国字問題である。今日ではワープロの普及にともなって、日本語の表記は新たな変革の時期を迎えており、表記の問題はまさに古くて新しい問題として、繰り返し議論されている。

表記にまつわる研究のもうひとつの大きな流れは、認知心理学やコンピュータサイエンスあるいは神経心理学の分野における日本語情報処理の問題である。特に人間の情報処理過程やその障害を探求する領域では、日本語の表記の多様性に関する問題が格好のターゲットとしてとりあげられ、多くの成果が報告されてきた。そこでは、主として漢字と仮名の処理過程を比較することから、語の持つ形

態的情報、音韻的情報がどのように処理されていくのかが明らかにされ、人間の情報処理モデルの構築に大きく貢献してきた。これらの研究は日本のみならず、広く諸外国の研究者の注目をも集めるところとなっている。

ところで本書の研究は、これら従来の流れとはやや異なった観点から、日本語の表記の問題にアプローチしようとするものである。ここでとりあげるのは、ある日本語の単語について、それがどの表記で書かれることが多いかという問題である。日本語が複数の表記が可能なものとしても、ある単語が、一定の条件下で通常どの表記で書かれるか、についてはかなりの程度の規則性が存在し、また一般の日本語使用者の間には、この規則について何等かの共通認識が存在するはずである。そしてこのことは、日本語の情報処理過程や、それが形成されていくプロセスに対して相当の影響を及ぼしているはずである。

ところがこのような、「表記の実態調査」ともいべき観点はこれまでほとんど考慮されることがなく、また系統的な研究も行われてこなかった。広瀬(1984, 1985)はこのような研究の必要性に言及し、「表記の親近性」という概念を導入して、それが単語の認知に及ぼす効果について検討しているが、その後もこの尺度概念についての体系的な調査研究はなされていない。実験心理学の分野において、言語材料を何等かの尺度において次元化し、標準化しようとする試みは古くから数多くなされているが、(cf. 荒木・梅本, 1984) それらをさかのぼってみても表記形態そのものを直接扱ったものは見当たらない。

そこでわれわれはこれまで、この問題を検討するための基礎資料を提供する目的で、同一の語における漢字・ひらがな・カタカナ各表記の主観的出現頻度(以下では、これを「主観的表記頻度」と呼ぶ)を評定法によって調べるという試みを行ってきた。119語の日常物品名を対象として、パイロットスタディとして行った評定実験(浮田、皆川、杉島、賀集、1991)の結果から、ある語をどの表記で目にする人が多いか、という判断においては、被験者間に共通の傾向が認められるこ

と、さらにそこから対象とした項目語を漢字型・ひらがな型といったいくつかの型に分類できることなどが明らかになってきた。またこのような表記に関する尺度次元が、実際の単語の読みや語彙飯台課題といった単語認知プロセスにも反映される心理学的実在性を持つものであることも、いくつかの実験で明らかにしてきた。(e.g., 浮田・浮田, 1991)

本研究の第一の目的は、先のパイロットスタディの119語から750語へと対象とする語の数や範囲を大幅に拡大して行った評定実験の結果(浮田、皆川、杉島、賀集、1993)を公表し、表記形態にまつわる問題のさらなる検討や、具体的な実験材料の統制に広く利用しうる資料を提供することである。さらに、第二の目的は、関連する補足実験や多角的な妥当性の検討、応用的・発展的な研究の提示などを行って、表記形態の問題に関してひとつの体系的な知見を提供することである。

以上のような序に続き、第2章では、750語を対象とした主観的表記頻度の評定実験について報告した。第3章では、表記頻度を規定する要因の分析として、中高年者を対象とした調査、対象とした語の熟知性に関する評定実験、教育漢字・常用漢字との関係、出現頻度との関係などについて検討し、表記のゆれという問題を提示した。第4章では主観的表記頻度という尺度次元の心理学的実在性を検証するためにわれわれが行ってきた実験などについて概観した。そして第5章において、まとめおよび今後の研究についての展望を提示した。

#### <引用文献>

- 荒木紀幸・梅本堯夫 1984 兵庫教育大学研究紀要, 3, 59-96.  
広瀬雄彦 1984 心理学研究, 55, 173-176.  
広瀬雄彦 1985 心理学研究, 56, 44-47.  
浮田宏美・浮田 潤 1991 第15回日本神経心理学学会総会予稿集  
浮田 潤ら 1991 人文論究, 40(4), 11-26.  
浮田 潤ら 1993 日本心理学会第57回発表論文集, 434.